

一三分

三時に飲んだコーヒーのことを、わたしはずっと後悔している。

午後の会議が長引いて、そのあとに明日使う資料の差し替えが入って、気がついたら定時を回っていた。行こうと思ったタイミングは何度もあった。何度もあったのに、そのたびに何かが挟まって、わたしは椅子から立たなかった。

立たなかったツケが、いま、全部そこに溜まっている。

パソコンを落とし、鞆を持って、廊下に出た。

トイレのほうを見て、足が止まった。黄色い三角の看板が出ている。

——清掃中。

入口の前にモップの柄が斜めに置かれていて、中から水の音がしていた。掃除の人がこちらに背を向けて、床を拭いている。あと五分待てば終わるのかもしれないし、十五分かかるのかもしれない。それを聞きに行くという選択肢が、一瞬だけ頭をよぎって、消えた。

——聞けない。

いや、そりや聞けないよ。

どうしてと言われたら、うまく説明できない。

というか、説明したくない。いま自分がどういう状態でここに立っているのかを、他人に向かつて言葉にするのが無理っていう、それだけなんだけど。

そうだ。一階に降りればいい。

ロビーの奥に広いトイレがある。エレベーターで六階分。長く見積もっても三分で着く。

そう決めた瞬間に、少しだけ楽になった。行き先が決まると、それまで漠然と広がっていたものが一本の線になる。その線の先にある出口まで、あと三分だけでもてばいい。

エレベーターホールまで歩く距離が、いつもより長かった。

歩幅を小さくした。踵から下ろすと響くので、爪先から置くようにした。誰も見ていないのに、そういう歩き方をしている自分が急に恥ずかしくなつて、でもやめられなかった。

下りのボタンを押した。

表示は一階で止まっていて、しばらく動かなかった。

待っているあいだ、わたしは窓のほうを見ていた。夕方の、まだ明るさの残っている空。ビルの向こうに雲が出ていて、風が強いのか、形が少しずつ変わっていく。

そういうものを見ていれば気が紛れるかと思っただけけど、そんなことはなかった。むしろ逆だった。何かに集中しようとする、そのぶん、集中していないほうの意識がまとまってしまう。散らばっていたものが一箇所に集まってくる感じがして、慌てて窓から目を逸らした。

考えないでいるのが、いちばん難しい。

到着音が鳴った。

開いた扉の向こうを見ると、人が立っていた。

——そうま相馬さんだった。

三階の別部署の人で、年は五つか六つ上だと思う。廊下ですれ違えば会釈をするし、エレベーターで一緒になれば天気の話くらいはする。それ以上のことは何も知らない。名字と、所属している部署の名前と、声の高さだけを知っている人。

降りるのかと思って一歩下がったら、相馬さんは奥に寄って、

「あ、下です」

と言った。

——乗り込むしかなかった。

次を待つという選択肢は、あった。あったけれど、いまここで一台見送るということ
が、どれくらいの時間になるのか計算できなかつたし、計算したくもなかつた。

三分。もう決めてある。

会釈をして、扉の側に立った。

目の前で扉が閉まった。

箱が下りはじめる。四階、三階――。

背中に相馬さんの気配があった。狭くはない箱で、二人しかいないのだから、距離としては十分に離れている。それでも背中側に人がいるというだけで、姿勢を崩せなくなる。

背筋を伸ばして、鞆を両手で前に持った。

横の壁が鏡になっていて、自分と相馬さんが並んで映っている。見ないようにして、扉の合わせ目のあたりに視線を置いた。

鞆を前に持つ理由なんて、本当はない。ないのに、そうしていると少し落ち着いた。

あと二階。

——止まった。

階に着いて止まるのとは、止まり方が違った。下降の力がふっと抜けて、箱全体が一度だけ小さく沈む。それから、何も起きなくなつた。

照明が落ちた。

真つ暗になつたのは一秒くらいだろうか。すぐに天井の隅から白い光がついた。非常灯だ。光が弱いぶん、影ばかりが濃く出る。パネルの端で、非常ボタンが赤く灯っていた。

階数表示を見た。

数字が消えていた。

同じ箱に閉じ込められたのに、たぶん、意味が違う。

相馬さんにとっては、帰りが遅くなるという話だ。ニュースになるような出来事ですらない。明日には笑い話にできる。

わたしにとっては、そうじゃない。

一階まで、あと二階分だった。三分で着くはずだった。その三分が、いつ終わるのか分からなくなった。

それを、この人に説明することはできない。

「……停電かな」

相馬さんの声がした。落ち着いた言い方だった。

慌ててない人の声を聞くと、こっちも慌てちゃいけない気がしてくる。

相馬さんがパネルに手を伸ばし、非常ボタンを押した。

少し間があって、雑音混じりに男の人の声が返ってきた。

「はい、防災センターです」

「あの、六号機なんですけど、途中で止まりまして。二人乗っています」

「二階と三階のあいだですね。確認しています。いま建物全体で停電が出ています」
「復旧の見込みは、どれくらいですか」

わたしは、その質問の答えを待った。

自分でも驚くくらい、待った。

「三十分ほど、と聞いています」

三十分。

息を吐いた。

吐いてから、気がついた。いま、安心した。

三十分もあるのに。長い、じゃなくて、それなら耐えられる、のほう^が先に来た。終わりの時刻が決まっている。それだけで、こんなに違う。

あと三十分。

三十分なら、わたしはもつ。

二 三十分

最初の数分は、意外と平気だった。

「停電なんて、久しぶりですね」

背中の方で声がした。振り返ると、相馬さんは壁に背中を預けて腕を組んでいた。

壁に体重を預けられるんだ、と思った。

この人はたぶん、乗るときに何分かかるかなんて考えていない。考える必要がないから。

分かってる。分かってるのに、その腕の組み方が、いま、すごく嫌だった。

「そうですね」

「去年の台風の時も、ここは止まらなかったんですけどね」

「何階まで行かれるんですか」

「一階です」

「あ、じゃあ同じですね」

同じだった。

だからこの人は、わたしが降りるまで一緒にいる。

「残業ですか」

「差し替えが入っちゃって」

「うちも今月はずっとそれです」

そこから部署の話になった。相馬さんは三階の管理部で、月末はいつも遅いらしい。子供がまだ小さいので早く帰りたいのだけれど、なかなか、と笑った。

子供がいるのか、と思った。

この人は、子供を連れて出かけるとき、出る前に行かせるんだろうか。行かせないような気がした。なんとなく、この人は行かせない。

普通の会話だった。

普通の会話をしているあいだ、わたしはずっと、次にどう相槌を打つかだけを考えていた。中身は何も入ってこない。

何か喋っているあいだは、まだよかった。声を出していると、意識がそっちに行く。でも話題はすぐに尽きた。互いに、それ以上踏み込むほど親しくない。

沈黙が下りると、箱の中の音がよく聞こえるようになった。空調が止まっていて、風の音がしない。自分の呼吸と、相馬さんの呼吸と、たまに上のほうで何かが軋む音。それだけだった。

静かだと、時間が遅くなる。

鞆からスマートフォンを出して、画面を見た。

止まってから、八分。

八分。

もって経っていると思っていた。十五分か、二十分か、そのくらいだと思っていた。それが八分だった。

画面を消して、鞆に戻した。もう見ないでおこう、と決めた。数えると、数えたぶんだけ遅くなる。

まだ、できることはあった。

立つ位置を変える。鞆の持ち方を変える。足の裏の重心を、内側から外側へ移す。どれも効いた。やった瞬間に、少しでも楽になる。

効くうちは、まだ余裕がある。

——たぶん。

どうしてこうなったのかを、順番に考えた。

三時にコーヒーを飲んだ。そこまでは普通だ。

四時からの会議が長引いた。長引いたけれど、途中で一度、資料を配り直す時間があった。あのとき立てば行けた。立たなかったのは、立つと会議が止まるからだ。六時前に差し替えが入った。あれは自分でやらなくてもよかった。誰かに頼めた。頼まなかったのは、頼むほうが説明に時間がかかると思ったからだ。

どれも、そのときは正しい判断だった。

——正しい判断を三つ重ねただけなのに、なぜだかわたしはここにいる。

「座りますか」

急に言われて、意味が分からなかった。相馬さんが自分の足元を指していた。

「立ってるの、しんどいでしょ。床、そんなに汚くないですよ」

床に座る、という選択肢が、頭の中に無かった。

無かったことに、いま気がついた。

「……大丈夫です」

嘘だった。

大丈夫なわけではない。

座ってしまいたかった。でも、座るという動作そのものが、いま、できない。膝を折るときに何が起きるか、自分でも分からなかった。

「そうですか」

相馬さんはそれ以上言わなかった。腕を組み直して、壁に寄りかかったままだ。座らなかった。

わたしが立っているから、座らないのだと思った。

それが、少しづらかった。

姿勢を変えないでいることが、だんだん難しくなってきた。

同じ立ち方を続けていると、どこかに力が集まってくる。だから重心をずらす。左に寄せて、しばらくしたら右に戻す。そういう小さな移動を、気づかれない速さでやる。気づかれない速さ、というのを、わたしはこのとき初めて意識した。

はじめのころは、考えなくてもできていた。

いまは、次にどこへ重心を移すかを、いちいち考えている。

考えないとできないものが、一つずつ増えていく。

これは多分、まずいやつな気がする――。

どのくらい経ったのか、分からなくなった。

見ないと決めたので、時間が測れない。測れないから、余計に長く感じる。見ればいいのだけれど、見て、まだ十五分だったときのことを考えると、手が動かなかった。

折り返しは、たぶんもう過ぎている。

そう思うことにした。半分過ぎたと思えば、残りは半分だ。

実際にはそんな計算に何の根拠もなかったのだけれど、根拠のない計算でも、あるとな
いとでは違った。

思い出したくないことを思い出した。

体験版はここまでです。

続きは製品版（全67ページ）でお楽しみください。